

# 『浮世床』の謎

吉丸雄哉

はじめに

『浮世風呂』『浮世床』は式亭三馬の代表作として名高い。これらは滑稽本と呼ばれる会話の忠実な再現が特徴の会話体小説である。いまさらながら、『浮世風呂』『浮世床』に関して、簡単な説明を行う。

『浮世風呂』は前編二冊が文化六年（1809）、二編二冊が同七年（1810）、三編二冊が同九年（1812）、四編三冊が文化十年（1813）に刊行された。版元は江戸の西村源六（前編く四編）が主版元で、三馬の実弟の石渡平八（前編・二編）とその主家の石渡利助（二編く四編）が名を連ねた。当時の庶民の社交の場を兼ねていた銭湯を舞台として、さまざまな年齢・階層の浴客の特徴やありさまを、その会話を精緻に記述することにより生き生きと写し出している。身ぶり・声色の芸である浮世物真似が文芸化された作品である。

『浮世床』は、三編まで刊行された。そのうち、初編・二編が三馬作である。三編は、三馬が文政五年に没したのち、滝亭鯉丈により執筆された。初編三冊が文化十年（1813）、二編二冊は同十一年（1814）の刊行。三編三冊は、文政六年（1823）に刊行された。版元は鶴屋金助（初編・二編）・柏屋半

蔵（初編・二編）と堺屋国蔵（二編）である。三編の版元は文栄堂（大島伝右衛門。序文より）であった。『浮世床』は、『浮世風呂』の隣の『浮世床』という髪結床を舞台とした。髪結床は銭湯と同様に当時の庶民の社交の場となっており、町人たちが髪結の順番を待つ間にかわした会話を描写した。『浮世風呂』と同じく当時の庶民の言葉を実に描写することを目指した会話体小説である。三編は鯉丈が執筆したものの、三馬したように世間話だけで作品を構成することはできず、鯉丈が得意とする茶番の趣向を積極的に髪結床の会話に持ち込んだ。

『浮世風呂』『浮世床』は、洒落本以来の精緻な会話体小説という形式が共通し、連作であることから、一括りで見られがちだが、実際に読んでみると、それぞれの作品の相違点が目立つ。

三笑亭可楽の落語を参考にした『浮世風呂』前編は、声色や形態を模写する要素が強い。女風呂を舞台とした二編・三編は、女性読者を念頭として、教訓性の強いものとなっている。<sup>①</sup>『浮世風呂』四編、あるいは『浮世床』初編・二編は、誰かが別の人の起こした事件を話すという内容が多い。一作一作ごとに特徴が異なり、三馬の試行錯誤のあとが見える。<sup>②</sup>

『浮世床』は三馬の代表作であるにもかかわらず、考察の対

象とした論文は多くない。また、『浮世床』にはその構成上、不思議な点がいくつかあり、それらに関して考察したものを見ない。本稿で、『浮世床』をとりあげて、その内容を検討するゆえんである。

### 一、『浮世床』と前田愛「濯東の隠れ家」

『浮世床』の考察では、前田愛「濯東の隠れ家」<sup>③</sup>（昭和52）は欠かすことのできない論考である。前田愛自身が専門とする人情本・滑稽本に関して、歴史学の知識を援用して考察した点に特徴がある。『浮世床』に登場する髪結床が江戸の都市制度のなかで果たした、見えざる役割をあきらかにした。

前田愛は「濯東の隠れ家」のちも、都市と文学に関する論文を書き続け、一連の論考は『都市空間のなかの文学』<sup>④</sup>として結実した。また、日本文学研究のなかに都市論と言われる分野を創りだした。現在の視点からすれば、カルチュラル・スタディーズのひとつといえようか。

前田の論考は鮮やかで、今もその価値を失っていない。その内容を要約すると次のとおりである。

まず、前田は江戸人の江戸の町のイメージが江戸城を核とする同心円の構図である事を示し、条里制都市（京、中国の都市）や放射式都市（パリ）と違うことを強調する。そして隅田川を折り目（中軸）とする図柄であることも述べる。

同時代の世界的な大都市ロンドンが煤煙で汚れていたことと

くらべ、自然の美しさがあることに外国人旅行者が驚いたことを述べるが、同時に超過密の裏町が存在したことも述べる。百三十万人の人口の15.8%が町人地、68.6%が武家地に住み、一平方キロあたり町人地六万七千人、武家地一万七千人であったことを述べる。そして、根津門前町往還ぞいの一角の絵図や寺門静軒『江戸繁昌記』（天保三から七刊）に描かれる裏町の様子を紹介する。

前田が着目したのは、表店と裏店の両方からなる町屋の構造である。

町屋は一ブロックごとに路次口の木戸で隔離されている。江戸の町に三十六あった見附の門が酉の刻（午後六時ごろ）に閉まり、町木戸が亥の刻（午後十時ごろ）に閉まる。それぞれの町屋にある路次の木戸は、建前は暮六つ（午後六時ごろ）に閉まるとするが、実際は町木戸と同じ刻に閉まる。町屋は、見附・町木戸・路次の木戸と三重の守りがあり、入れ子型の空間となっている。

前田がそこから読み取ったのは、裏長屋の住人（小職人・棒手振り・遊芸人）が表通りの商人にとりかこまれていること。さらにその上位層として町内管理の五人組の地主・家主層があるという支配構造である。

前田は、町内のブロックと長屋のコミュニティを考察するために、髪結床に着目した。髪結床は鑑札（免許）のいるもので、一町に一軒ずつしか認められなかった。髪結床が町内でのコミ

ユニティセンターであることは、前田が発見したことではない。だが、髪結床が四辻の角店の木戸番・自身番所に向かい合う位置に髪結床があり、町木戸の警衛や通行人の監視という江戸市中の「制度の核」であることを重視して『浮世床』を読み解いたのは、優れた眼力であった。

前田は、『浮世床』において、『浮世風呂』の銭湯よりも、都市空間のユニットが意識的に再現されていることを、口絵を例に示す。前田は髪結床を表店の住人と裏店の住人とか相互に噂を交換する情報センターとみるが、表店層と裏店層に、実際に会話が嘯みあう場面は少なく、秩序に差があり、『浮世床』の髪結床主人鬘五郎の役割は「デイスコミュニケーションを解きほぐし見せかけのコミュニティを創りだす機軸と弁舌にある」「地域社会の安定した秩序の強力な代弁者」とみた。

作品のなかに埋没している、政治的なコンテクストを掘り起こし、現代の読者が意識しにくい制度のなかに、登場人物たちを当てはめていったのは、前田の真骨頂である。

前田は、言語を中心とした会話体小説である滑稽本の様式そのものからも、支配的な制度を読み取る。

『浮世風呂』『浮世床』における表現の工夫は女性読者を対象とするためとし、三馬が作品で白抜き圈点により鼻濁音の厳密な再現を目指したことは、音声記す差別の正確な記録であるとする。作品のなかで、音声言語のなかに文字言語を組み込むことで町方の秩序が維持されており、日常生活から解放される

束の間のたのしみを日常語の意味（センス）を無意味（ナンセンス）に切り換えることで生む、言葉あそびの世界だと判断する。そして、表店の人間がセンス（常識）にもとづく命名（銭・中・聖・賢・徳）であることを指摘する。前田の考察は、『浮世床』二編が裏手で口よせする巫女の場面に深くかわつていないことを指摘する一方で、話を『道中膝栗毛』発端の幽霊の場面へとつなげていき、最後は隅田川東岸の、人情本が描いた郊外の世界へとたどり着く。

松本四郎「幕末・維新时期における都市の構造」（昭和45）や竹内誠「寛政―化政期江戸における諸階層の動向」（昭和47）や加藤秀俊『都市と娯楽』（昭和44）といった当時最新の歴史学の成果が十分に使われているのが、前田によるこの論考の特徴だが、その一方で、当時の歴史学が着目していた「コミュニティ」などのテーマがそのまま受け入れられている感はいない。とはいえ、『浮世床』を扱った文学的考察では金字塔的存在だといって間違いない。

## 二、歴史学から見た江戸の長屋と髪結床

―吉田伸之氏の研究を中心に―

前節で述べたように、前田愛の歴史学の成果を多用した論考である「濃東の隠れ家」から三十五年の歳月が経っており、髪結床をはじめとする江戸町人に関する研究も深まった<sup>6</sup>。あらたな歴史学の成果を用いれば、前田愛よりも深い考察が得られる

のではないかと、筆者は考えた。よって、歴史学の研究成果を調査し、吉田伸之らの研究などを学び、興味深い結果を得た。吉田伸之をはじめとする最近の江戸の庶民研究での、町人の描かれ方、とくに髪結床の描かれ方が前田愛の時代の研究とは異なるのである。

以下、吉田伸之の論考を紹介し、その特徴と前田愛の考察との違いを説明する。

吉田伸之「巨大都市における身分と職分」を見る。<sup>⑦</sup>

町の髪結に、札が必要（明暦ごろより確認。『正宝事録』であり、「御定之外」の橋詰・辻々・河岸端での営業禁止が禁止されていることや 髪結Ⅱ町の番所につめる番役の代替者と公認されていることから吉田の論考は始まる。

続けて、時代順に髪結の実態を考察していくのだが、十七世紀中頃の江戸の髪結にかんする考察は次のとおり、

町用をになうことで、町によって自己の存立を担保され、町の番所Ⅱ髪結床を拠点とし、町域をテリトリーとして営業するという、「町の髪結」が髪結の本源の形態。（260頁）

振売札を持つので広義の「振売」層の一形態といえる（262頁）。

所有と経営の即自的結合（262頁）。

であり、これらは前田の論考と大差ない。

違いが出てくるのは、寛政期から天保期にかけての変容である。そこでは経営権である株を所有する者と、実際に床を経営

し髪結の業務にあたる者たちが分離することが示される。

揚銭収取を本位とする髪結株式の所有権が経営から乖離してゆき、髪結の職分とはまったく無縁の商人層によって物権化していった（265頁）。

という状況となる。『浮世床』に描かれた髪結床はこの時期のものである。この状況がさらに推し進められると次のような状況となる。十九世紀後半における江戸の髪結の存在構造は、

町人身分の下位の一派生形態（281頁）。

職人の一形態としては公定されることなく、結局は「素人」たる「平町人」の一形態としてしか位置づけられなかったこと、しかも現実には、株主Ⅱ所有と、下職Ⅱ経営とがほぼ完全に分離してしまい、固有の一職分としての実質は、所有から疎外された下職層や新床層によって担われるに至っている。<sup>⑧</sup>（282頁）。

である。

前田愛が描く髪結床との大きな違いは、前田愛が髪結床を幕府が用意した支配制度の一部分、とくに町屋の管理の核と位置づけるの対し、吉田伸之の描く髪結床は実際の株の所有は行えないまま、経営のみ担わなくてはならない「素人」たる「平町人」である。前田の髪結床が支配側に立っているとするれば、吉田の描く髪結床は「町人身分の下位の一派生形態」として支配される側であり、まったく逆の存在である。

歴史学では「身分的周縁」という概念で、身分的多様性を把

握するやり方が進んでいる。髪結は「身分的周縁」に位置するものと把握されるようになってゐる。

なお、町人の描かれ方もここ二十年ほどの歴史学では特徴的がある。吉田伸之による江戸時代の民衆の把握をみてみよう。

吉田伸之「表店と裏店——商人の社会、民衆の世界」『巨大城下町江戸の分節構造』山川出版社、平成12）によれば、表店にひろがる商人の社会と、裏店に充滿する民衆の世界。町方社会の対比的な重層構造が民衆の世界にあるとする。表店は店舗を営む商人や職人である。裏店は職人手間取や日雇稼（力仕事、雑役）と零細な商い（棒手振、時之物売）あるいは賃仕事の人々であり、これらは相互に流動的とみなされる。

### 三 『浮世床』の謎

『浮世床』にはさまざまな階層の老若男女が登場する。大まかな内容を次に示す。これは本田康雄『浮世風呂・浮世床——世間話の文学』をもとに、その内容を大幅に増補し、さらに場面を分割するなどしたものである。ゴシック体は表店の住民であり、通常の字体は裏店の住民である。

『浮世床』初編の各場面（ゴシックは、贅五郎一家を除いた表店の住民）

1 隠居、髪結床の主・贅五郎の朝寝に文句を言う。 留（弟子）と隠居

2 勇み肌の男、色女のところへ泊まり女房から嫉妬される話。蜂が着物を返さない話。 贅五郎と勇み肌。

3 素読指南の孔叢先生、やたらに漢語をつかつて出鱈目を言う。

4 びらの話。竹本、咄家、湯桶読。 孔叢と贅五郎と留

5 隠居、朝湯や髪の話。 隠居と贅五郎。

6 隠居、朝湯や髪の話。 隠居と贅五郎。

7 隠居・でんぼう・贅五郎。 じやんこ熊とでんぼう両人の雑談。女郎にもてる話。（隠居の髪の上上げ）。

8 隠居加わり墓参りの話。 髪結代の話。

9 隠居親子への評価。 通人・利口の論。 頭の形。 山王神社。

10 贅五郎・熊・伝。

11 すてき亀加わり雑談。 熊の江戸っ子自慢。 熊の出入りの旦那、仕事の催促。

12 辰登場。 あだ文字という常盤津師匠の噂話。 常盤津稽古場の様子の話。

あだ文字、十四、五の弟子娘に浴衣をもたせ湯上り姿で通りかかる。

あだ文字と男たちの会話。 贅五郎・熊・伝・亀。

あだ文字の評、表を通る年増女、その妹を品評する。

菓子売りをからかって呼び売りの口上を言わせる。 熊・

- 伝・亀の退場。入れ替わり息子株たち徳太郎・聖吉・賢蔵の登場。女房お吉出てくる。贅五郎たち朝食をとる。小間物屋櫛八登場。(上巻終)
- 13 息子株連中、色女からの手紙を読みかねている。古学・歌謡の話。(贅・留は食事でない)
- 14 贅・留戻ってくる。息子株、表を通る美人を批評する。女房論に花が咲く。嫉妬深い女房。
- 15 上方商人作兵衛来る。上方者の金惜しみの話。贅五郎、上方の達引をけなす。そばの人仲裁に入る。
- 16 作兵衛の駕籠の話。短八・長六話に加わる。女郎の三蒲団。
- 17 長六・短八、長六が貰ってきた猫の名前を考える。
- 18 六十余の爺様中右衛門、道楽息子を探しにくる。長六・短八・中右衛門・贅。(中巻終)
- 19 贅五郎、長六・短八、女郎買について息子株連中について教訓話をする。
- 20 悪戯する丁稚来る。贅五郎、長六・短八奉公人、居候の話。贅五郎、長六・短八居候(飛助)、世話になっている家の悪口を言う。贅五郎、長六・短八飛助のいる家の主人・銭右衛門登場。贅五郎、長六・短八裏の家で呼んだ巫女(いづな)の話。転じて役者の芸風の今昔。俳諧師が行脚して狼に食われた話。贅五郎、長六・短八
- 25 26 乳母、金持ちの家の五歳の娘お滝をつれてくる。
- 27 でんぼう松・竹・梅来て、乳母をからかう。巫女の口寄せに関心を持つ。(下巻終)
- 『浮世床』二編の各場面(ゴシックは、贅五郎一家を除いた表店の住民)
- 1 巫女の口寄せ。婆さんが亡くなった犬を寄せた。
- 2 死霊(変助の妻)の恨みから嫉妬論へ。集まる女の寸評。松・竹、短・長、銭右衛門、土竜、この家の女房。
- 3 甚太が女房、上方の人形遣の爺さまの口寄せ。天狗になっている。
- 4 戻ってきて小咄。延公の遊女あがりの女房の噂。金のないまま登楼した若いころの銭右衛門の話。(上巻終)
- 5 土竜の話。馬陰と酒楽和尚で岡山鳥を訪問した話。読本調の口ぶり。馬陰がどぶに落ちる話。
- 6 戒名の話。八百屋の青右衛門の息子の妹お柚の話。戒名が短い。多くのものが帰る。銭右衛門・長・短。
- 7 髪結渡世の話。贅五郎・松・竹。蛸助会話に加わる。昔の髪結床の話。
- 8 鳥屋のちやば八の口上。
- 9 丁稚、瞽女の越後節を披露する。
- 10 読本の話。ちやばうまく読めない。
- 11 櫛屋櫛吉、吉原の文使い銅助登場、ちやば八と蛸助の拳勝

負。

12 長口上のばあさま登場。金鳴屋のおふくろ。お吉が出て相手をする。(下巻終)

## 歴史と小説の間

いろいろと生活の苦勞はあるが、それでも裏店の住民たち(熊や亀やでんぼう)は、女郎の話をしたり、あだ文字にはなしかけたりとあつげらかんと暮らしている。

表店の住人たちである長六と短八の意見ではあるが、農村に比べて、都市生活ではどのようにしても身過ぎ世過ぎができるといった江戸賛歌が『浮世床』初編下23に見える。

(働かない居候への感想) 短八「業晒しめ、能いけれどしをして、いつまで居候に成つてある氣だ」鬢五郎「あまざけを売つても、渡世は出来そうなもんだ」短「とうがらしなどいふものは家毎に沢山入るものぢやアねへが、あれでさへ家業になつて通る。これほど有がたい江戸にゐて、渡世の出来ぬ奴は本いくぢなしだ」びん「すべて何の業をするとも、田舎へ出て、銭設をするやつは、それだけの力だの(引用者注：それだけの力量しか持つていない)。立派にして通るものは、旅歩はせずト江戸に座居て事をするはさ。そこがお江戸のありがたい所だ」

これは表店の人間の氣樂を述べたのではなく、むしろ成功への教訓として、読者を論ず効果が主であると見るべきだろう。

歴史学では、社会の周縁に沈み、苦勞の多い生活を送っているはずの裏店の住人でも、『浮世床』ではその生活の苦澁は会話にほとんどのぼらず、他愛のない会話をかわすさまが描かれるだけである。

また、鬢五郎も店を借りてはいるものの、手広くやつて、上昇の意志が強い。「所有から疎外」された嘆きなど感じとれない。

『浮世床』二編下7

蛸助「松さん、それにつけてもこの鬢公は如才ねへよ。場所は五六町預り、床は三ヶ所預つて皆弟子を出して置くシ、云分はねへ。その上に、この床は自身に手をおろして欲ばるか。それだから金がウンウンとうならア」松「おほかた預つたといふも虚だろうス」竹「他の名前にして内証はてんぐが持居るのス」

などと言われる。もちろん株まで所有するとみる、松の推測は正しくなく、預かり床なのだろうが、それでも諸方に弟子を派遣し、意気軒昂として、所得を得る姿が描かれる。貧しく描かれては決してない。

歴史学の見ると小説世界の齟齬だが、ここでは事実として、近世の庶民の多くが周縁の身分に身を沈め、日々の暮らしで苦しんでいるものの、小説世界は理想化されており、貧しいながらもあつげらかんと日々の暮らしを楽しむ姿が描かれたのだと考える。また、髪結床の亭主の鬢五郎も、実際の髪結たちの姿よりも、経済状況が良好に描かれており、また前田愛がそ

の構造を明らかにしたように、支配する制度側に所属するように描かれていると考えておく。

### 『浮世床』の奇矯な人物

以前、三馬の滑稽本のなかに黄表紙に出てくるような現実にはなかなかいそうにない奇矯な人間が出てくること、それが『黄表紙風の合巻』の影響であることは論じた。しかし、そういった人物、『浮世床』でいえば、孔糞・土竜などがどうして、滑稽本に出てくるのかは、答えが出ていなかった。今回、表店の住人と裏店の住人という視点で、ひとつの見解を得た。

孔糞は素読指南の先生で、世間の常識がなく、言葉遣いは漢文調のおかしな人物である。裏店の住人であるでんぼうと表店の住人である隠居はともに孔糞を非難する。

#### 『浮世床』初編上

でんぼう「コウ今帰つたばくねんじんも大きな屎癡呆だぜなア」  
びん「誰、ム、孔の字か」  
いんきよ「ム、放屁儒者か。あいつが何をしつて。まだ不思議に店を持通すめつけ物よ」  
でんぼう「エ、コウ儒者といふ奴は余程博識な者だと思つたら、一向しきなトンチキだぜ。」

日頃は会話の交わらない表店と裏店の住人であるが、こういった奇矯な人間はともに共通の話題となる。『浮世床』でいえば、巫女（二編2・3）や上方者（初編16・17）など共同体の部外者に対しては、表店・裏店どちらに住んでいるか関係なく一緒

に話題にしている。読本かぶれの土竜も二編の2・3・4・5と表店・裏店の住人わけへだてなく話題を提供している。奇矯な人物を出すことは、階層を超えて会話を成立させるための仕組みだと思われる。

### 巫女の口寄せと『浮世床』の構想

『浮世床』はその名の通り、髪結床を中心にして、そこに来る客たちの会話を写したものである。しかし、二編の上では、髪結床ではなく、髪結床の裏側にある隣家に来た巫女の口寄せが中心となる（二編1・2・3）。巫女の口寄せでは、「亡くなった大」「変助の妻」「上方の人形遣の爺さま」が呼び寄せられる。初編下の終わりでは、「是より二編目、巫女口倚のはじまり、さやう。サ、ざりませいッ、テンく」と二編で「巫女の口をよせてさわぐさまへのおかしみ」を描くことを予告する。二編の口絵に口寄せが描かれることから、この趣向を三馬がとても重視していたことがうかがえる。

では、なぜ三馬は髪結床を離れて、巫女の口寄せを描こうとしたのであろうか。

考えられるのは、『浮世床』に出てくる登場人物の構成である。初編の登場人物をよく見ればわかるが、常磐津の師匠あだ文字（初編10・11）とその弟子を除くと女子どもが出てこない。『浮世床』は町屋の庶民を描くのが主眼だったはずだが、日中の町屋に一番多くいるおかみさんやおばあさんや子どもがほとんど



描かれないのである。髪結床に女性や子どもは行かないので当然といえる。二編で巫女の口寄せを扱ったのは、初編に出ないこれらの人物を登場させる意図があったと思われる。巫女のある口絵には、長屋のおかみさん衆やおばあさん、それと子どもが集まっており、その意図は歴然としている。

髪結床に集まる男連中だけでなく、長屋の女子を描こうとしたのは、『浮世風呂』と構想を合わせたのだろう。『浮世風呂』は前編が男湯編だが、二編と三編が女湯編であり、四編になつてようやく男湯に戻る。二・三編と女湯が続いたのは、男湯よりも人気だったからだろう。『浮世床』でも、実際の読者ともなる、女や子どもを出そうと思うのは自然だったと思われる。

しかしながら、三馬のこの目論見は成功しなかったと思われる。巫女の口寄せでは、初編で出ない種類の登場人物（大あり）が出て、おかしみを誘うが、一人による一方的な語りすぎない。町屋に住む女、子どもらの闊達な会話を描くことはできない。けっきょく、二編上がおしまいまでいくまゑに、髪結床に世界は戻ってしまう。また初編で三巻構成だったのが、二編では上下巻でおわってしまったのも、内容が不足してしまったためと思われる。

二編の巻末には「俗談平話のおかしみあることどもをひろひあつめ、人情のありさまをくはしくうがちて、来春<sup>うつくし</sup>嗣<sup>つぎ</sup>て出す。看<sup>かん</sup>官<sup>くわん</sup>三編<sup>さんぺん</sup>の発市<sup>はつし</sup>を俟<sup>まち</sup>ば幸甚々々」とあるが、けっきょく三馬による三編は刊行されることはない。こういった刊行予告がある

ものの未刊におわる例は珍しいものではない。<sup>13</sup>滝亭鯉丈による『浮世床』三編の南仙笑楚満人（為永春水）序文に「文栄堂に頼まれて柳髪新話の三編目を本丁庵（引用者注…三馬のこと）へ言ひ入れしは三年已前の事なりしが、近年先生多病にして、風呂の加減も床髪も暫らく筆を留め置くのみ」とあって、続編が出なかったことは病気が理由だとする。

しかしながら、文化でも文政でもほかに合巻の作はあり、『浮世風呂』でも『浮世床』でも、続編を執筆する機会があったはずである。書かなかったのは、趣向の行き詰まりではないかと考える。

十返舎一九には長屋物というべき、長屋の住民の会話を中心にした滑稽本がある。『串<sup>くわだ</sup>戯<sup>たわ</sup>二日酔<sup>にふか</sup>』（文化八年刊）・『滑稽<sup>くわき</sup>臍<sup>し</sup>栗<sup>り</sup>毛<sup>も</sup>』（文化十一年刊）・『膝栗毛<sup>ひざり</sup>発端<sup>はつたん</sup>』（文化十一年刊）・『続々膝栗毛<sup>くわくくわき</sup>』全三編（天保二年から天保七年刊）がそれにあたる。

一九の『滑稽臍栗毛』と三馬の『浮世床』とを比べてみれば、違いがはっきりする。『滑稽臍栗毛』では「子種」という取上げ婆が中心人物であり、女房らがたくさん出てくる。『膝栗毛発端』にも、弥次郎兵衛の女房おふつや新しい持参金つきの女房おつばらが出てくる。『浮世床』が男たちの世界を描くのに対し、一九の長屋物の滑稽本の登場人物は偏りが無い。とはいえ、一九の『膝栗毛発端』は一度切りの内容であり、『滑稽臍栗毛』も長屋連中の他愛のないおしゃべりでは間を持たせることができず、大屋の祝いの出し物の稽古へ趣向を転換しつつ、予告した

続編が未刊のまま終わっている。一九が再度、長屋の登場人物を描くには間をおかねばならなかった。

三馬による『浮世床』三編が執筆されなかったのは、『浮世床』二編と同じ年に刊行された一九の『滑稽躰栗毛』の影響があるのではないかと考える。

### 『浮世床』の教訓

筆者は以前『浮世風呂』二編三編に教訓性の強いことを論じた<sup>14</sup>。『浮世床』では、『浮世風呂』二編三編ほど、全体を支える趣向として教訓が置かれているわけではないが、それでも読者に教訓を与える会話が散見する。

たとえば、『浮世床』初編7で隠居親子について熊とどんぼうが論評する。

どんぼう「通人だの通り者だのといふ奴は全体野暮だぜ。その証拠には皆身上が茶々むちやくだ」鬢五郎「野暮だくといふ人は身上をよくして人にも笑はれず、間には貧乏なやつを救つてやつたり何角する。おらアその方が通り者だらうと思ふ」

廓遊びをして、散財し、通人や通り者と呼ばれることの愚を説く。

初編下20でも通人論はある。

びん「むかしの誰とかいふ女郎が、通人とは廓へ這入らぬ人を通人といふ、女郎買をして金をつかふ者は、おそかれ速

かれ身体を滅ぼすから野暮だ、と云つたさうだが、悟つて見ればそんなものかい」短八「違ねへ」長六「角屋敷宛には野暮の手へ渡り、ト川柳点にあるが、うそはねへ」びん「通だの通り者だのいはれて身体を潰すよりかも、野暮と云はれて金をためた方が利方だの」(以下さらに続く)

短六や長八は表店の人間であるが、表店の人間同士がとくに教訓性の高い会話が交わす。奉公人に關しても、

びん「奉公人も主人は揉む事だが、主人も奉公人を選まねへと、身上の為にならぬの」短い「人の身体の能くなるのは、奉公人さへ能ければ速だ」(初編下24)

と、世間知を伝える実用的な会話がなされる。

『浮世風呂』『浮世床』の舞台となつた銭湯と髪結床は、江戸時代の町内に一軒ずつ置かれ、当時の庶民が集まる場所であり、相互の交流の場であつた。庶民同士の会話により読者は教訓や生きていく上での知恵を得る利点があつた。

おわりに

前田愛「濯東の隠れ家」は、『浮世床』を対象とし、髪結床が江戸の都市制度のなかで果たした見えざる役割を考察した論文である。

一九九〇年代以降になされた、吉田伸之の論考をはじめとする歴史学では、髪結床を前田とは違つた捉え方をする。『浮世床』で描かれる寛政期から天保期の髪結床は、髪結株式の所有権を

持たない町人身分の下位の一派生形態という位置づけである。

前田愛の論考では制度側にある髪結が、吉田伸之の論考では「身分的周縁」のひとつと見なされる。相互の落差は、吉田伸之の見る髪結床が現実の髪結床であり、前田愛が考察する『浮世床』の髪結床が理想化されているためだろう。

『浮世床』は、髪結床が商人層を中心とする表店の住民と日雇い層を中心とする裏店の住民が集う場所で、相互に交わることのない両層のバランスをとる立場に髪結床の亭主がいるように描く。『浮世床』は『浮世風呂』と同様に、登場人物の会話を通して、世間知を伝え、道徳を再生産する小説である。

表店層と裏店層の会話はほとんど交わらず、両層に溝があるのは確かだが、孔糞・土竜のような奇矯な人物、あるいは上方者や巫女といった共同体の外部にいる人物に出すことにより、髪結床に集う人々はひとつにまとまるのが会話からうかがえる。

『浮世床』で排除されているのは、裏店の住民のかみさん・おばあさん・子どもであり、『浮世床』二編で髪結床と関係のなく、巫女を出すのは裏店のそれらを描く目的のためであろう。

別の人が起こした事件のあらましを誰かが話すという形式が中心となっている『浮世風呂』四編と『浮世床』初編・二編は、『浮世風呂』前編・二編・三編に比べて叙述性が高く、読みやすいのは確かである。そのかわり、登場人物それぞれの会話の描写性は薄まった。また、髪結床を舞台とする制限が、実際の

裏長屋の中心にいる女房連中や子どもらを描くには不利に働き、女風呂を舞台とする『浮世風呂』二編三編のように女性読者を獲得することができなかったのではないかと考える。

『浮世床』の三編が書肆に期待されつつも、とうとう三馬の手で書かれなかったのは、『浮世床』が髪結床を舞台とする設定からすれば当然の帰結だったのかもしれない。もちろん焼きなおしをすれば、同じ内容を書けなくてはなかったのだろうが、それをせずに、『浮世風呂』『浮世床』も新作を出すことに新しい趣向を盛り込むことを目指したのは、三馬の戯作者としての矜持のあらわれだと思われる。

#### 注

(1) 拙著『式亭三馬とその周辺』二章四節『浮世風呂』女風呂編における教訓（新典社、平成23・4）に考察を示す。

(2) 本田康雄『浮世風呂・浮世床——世間話の文学』（平成6・4）が内容の分析を行う。

(3) 前田愛『濯東の隠れ家』（初出は「展望」昭和52・7。のちに『都市空間のなかの文学』昭和57・12所収）。

(4) 注(3) 前掲書『都市空間のなかの文学』。

(5) 前田愛『濯東の隠れ家』は、松本四郎「幕末・維新时期における都市の構造」（『三井文庫論叢』三井文庫、昭和45所収）、竹内誠「寛政—化政期江戸における諸階層の動向」（『西山松之助編「江戸町人の研究」1、吉川弘文館、昭和47所収）、加藤秀俊『都市と娯楽』（鹿島研究所出版、昭和44）を参照する。

(6) なお、京都の髪結に關して、塚本明「町抱えと都市支配——近世京都の髪結・町用人・年行事」を中心に——（『日本史研究』321、日本史研究会、平成1・5）がある。髪結の町抱えという制度に着目し、「町によって抱えられた髪結は、町の内にいながら、町の中核の構成員の平等性を外側から支える役割を果たす」（5頁）という評価をする。髪結が町制度の一部分であるという点で従来の論考の流れにそうものといえる。

(7) 吉田伸之「巨大都市における身分と職分」（『近世都市社会の身分構造』東京大学出版会、平成10・5所収）。初出は『日本の社会史』七卷「近世における身分意識と職分観念」（岩波書店、昭和62・7）。

(8) 横山百合子「十九世紀江戸・東京の髪結と女髪結」（『別冊 都市史研究 パリと江戸——伝統都市の比較史へ』山川出版社、平成21・6所収）はこの時期の女髪結を論じたもの。

(9) 本論考に關係するのは、塚田孝『近世身分制と周縁社会』（東京大学出版会、平成9・11）、塚田孝編『職人・仲間』（シリーズ近世の身分的周縁3、吉川弘文館、平成12・8）、塚田孝編『都市の周縁に生きる』（身分的周縁と近世社会4、吉川弘文館、平成18・12）といった塚田孝による一連の編著である。「身分的周縁」という見方の広まりがうかがえる。

(10) 吉田伸之「表店と裏店——商人の社会、民衆の世界」（『巨大城下町江戸の分節構造』山川出版社、平成12・1所収）。

(11) 注(2) 前掲書。

(12) 拙稿「三馬の『黄表紙風の合巻』」（拙著『式亭三馬とその周辺』二章三節）。初出は『式亭三馬の『黄表紙風の合巻』』（『国語国文』74巻4号、京都大学国語国文学会、平成17・4）。

(13) 拙稿「式亭三馬の未刊作品の広告」（『三重大学日本語学文学』22、平成23・6）にその実態を詳述。

(14) 注(1) 参照。

(15) 『浮世風呂』四編と『浮世床』初編と趣向が似るのは執筆時期が同じのためだろう。

※『浮世床』の本文引用は新潮日本古典集成『浮世床 四十八癖』（本田康雄校注、新潮社、昭和57）から行つた。

本稿は二〇一二年三月三日に行われた第2回アジア懇話会（於三重大学）での口頭発表「近世小説にみる江戸のコミュニティ」を發展させたものである。

「よしまる・かつや 本学教員」